

野口米次郎

定本詩集

表象抒情詩

第一書房

80

75

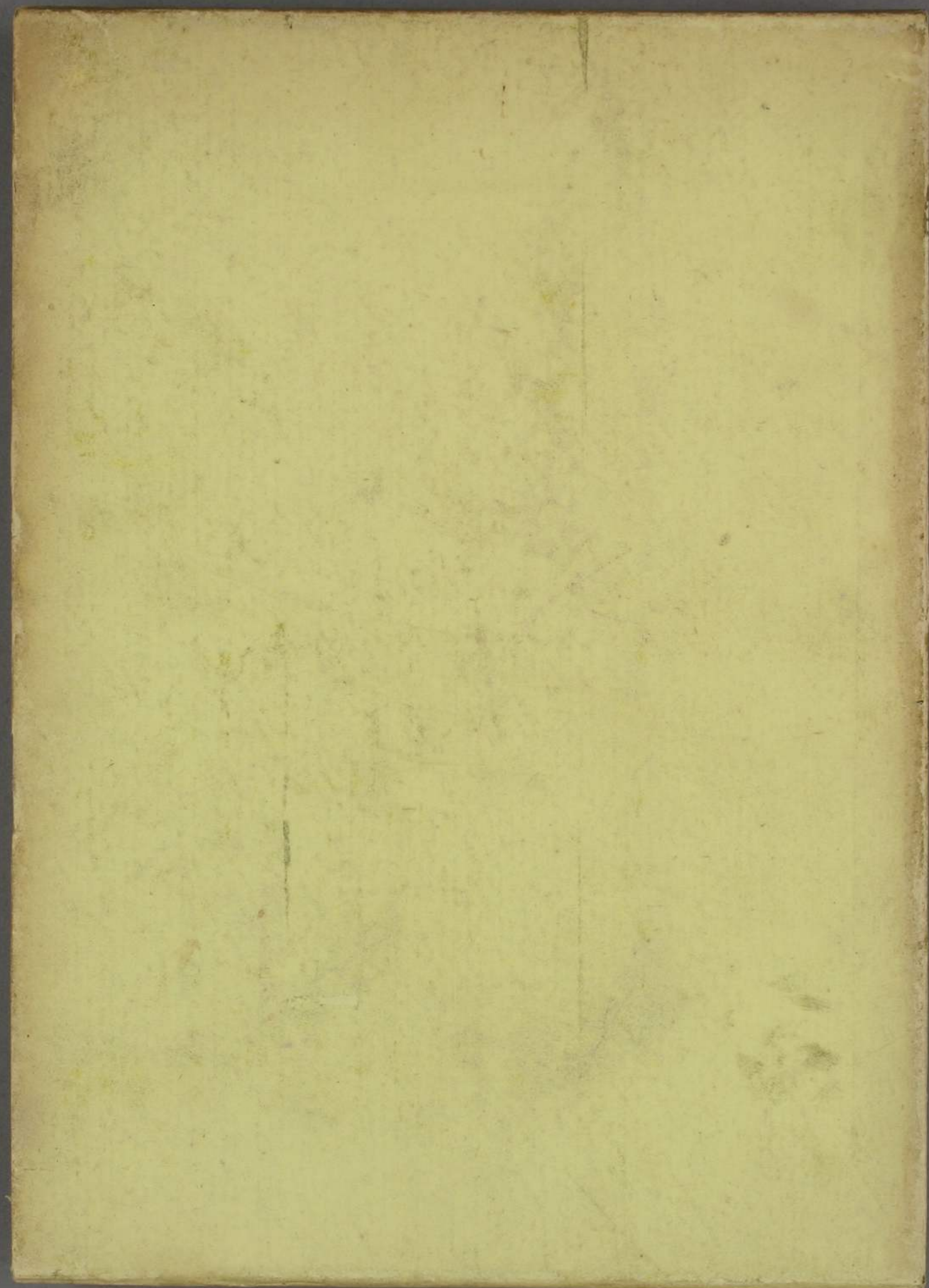
70

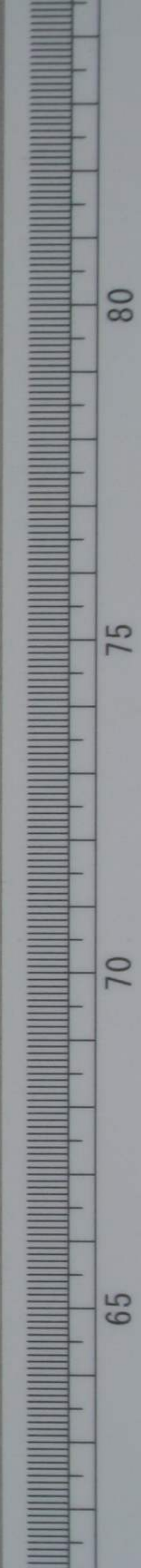
65

野口米次郎
定本詩集

表象抒情詩









象表
詩情抒

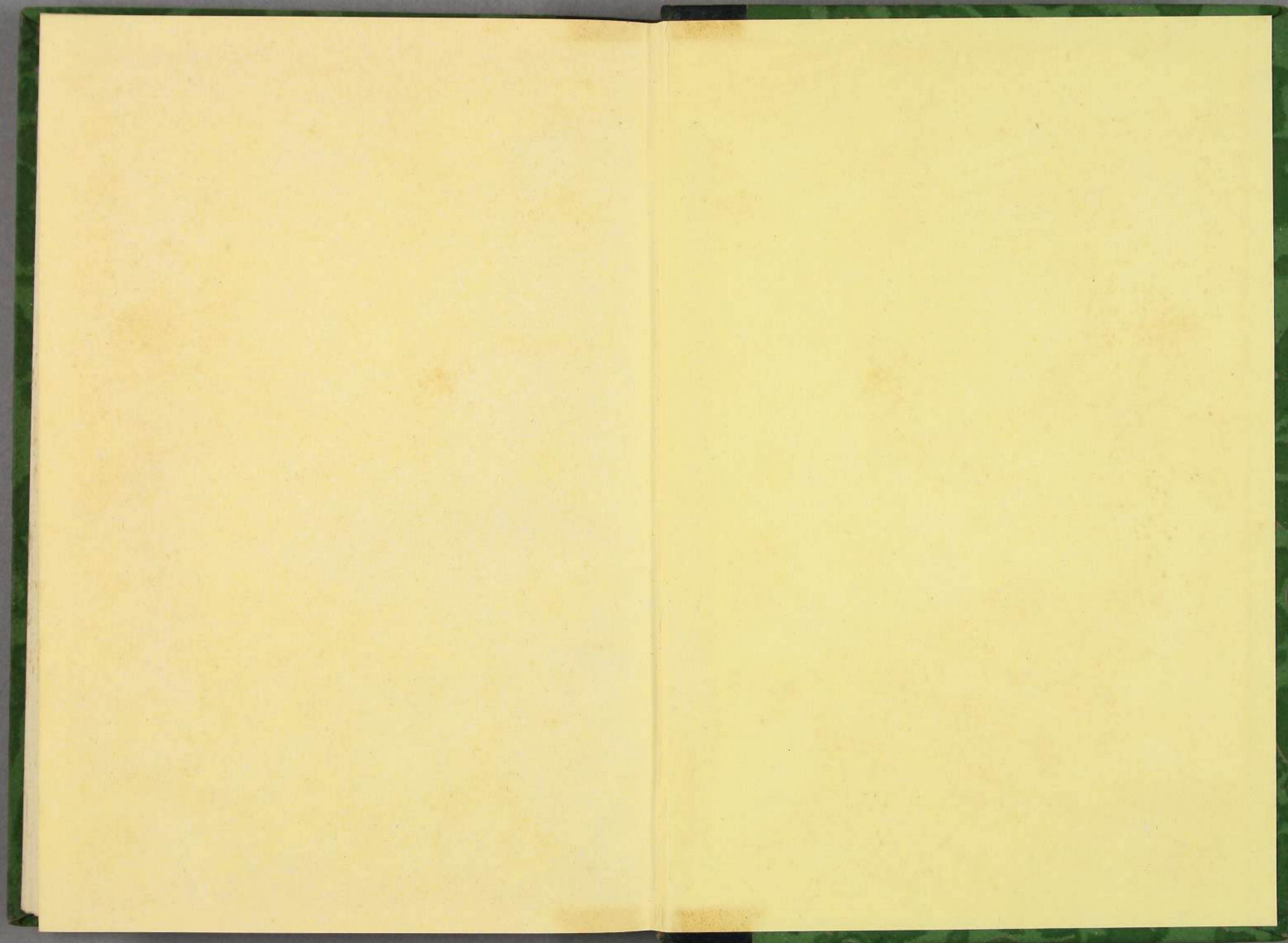


口野
郎次米



房書第







詩

集

野口米次郎著
表象抒情詩

東京高輪
第一書房刊行

目次

蓮花崇拜	二二
影	二四
禪僧	二六
秋の歌	二九
雨	三〇
森の彼方	三三
狂想	三四
日本の夜	三六

夜の女……………六
 空しい歌の名……………三〇
 由井濱にて……………三三
 影の一旅客……………三三
 月夜……………三六
 向日葵……………三六
 雀……………四〇
 藝術……………四三
 古鐘……………四四
 私の歌……………四六
 支那……………四九
 蓮花……………五三

廣重に興ふ……………五五
 歌麿の美人……………五六
 兩國の花火……………六〇
 歌の道……………六三
 林中……………六四
 偶感……………六六
 詩人……………六六
 追憶……………七〇
 右と左……………七三
 朝顔……………七四
 蟬……………七六
 瀬戸内海……………七六

京都	八〇
大佛	八三
夏は過行く	八五
芝金	八六
足の音楽家	八八
沈黙の鳥	九〇
幽霊	九二
青春り	九四
網渡	九六
微風	九八
私は太陽を崇拜する	一〇〇
飛行機	一〇一

火宅を出でよ	一〇四
風の路	一〇六
空中の歌	一〇八
木の葉	一一〇
竖琴	一一二
鶯の頌	一一五
歸去來賦	一二八
季の彈奏者	一三二
七月の日本	一三三
奇怪な雪	一三四
薔薇	一三七
坂道	一三〇

棕櫚の葉……………一三三
苦行者……………一三四
新年言志……………一三五

私の詩は半身像だ、
讀者諸君、胸の下から刻んで、どうか、
完全な全身として下さい。

蓮花崇拜

禮拜者は、谷からも山からも忍び寄る、

その心は着物と共に、白い。

彼等は今聖き池のまはりに坐る、池はこれ蓮花の聖殿……

暗明の水を貫く無音の蕾は、恰も合掌の女僧のやうだ、

恰も合掌の女僧のやうに、禮拜者は合掌する、祈願する、

沈黙の祈禱は言葉の祈禱よりも更に尊い。

明け行く夜も、星も、その歌を止め、

鳥や空氣は今や動き始める。

ああ、復活だ、世界の復活だ、人生の復活だ……

太陽はさし上る、合掌の蕾は

『南無阿彌陀佛』と唱へ、ぱつと破れる。

天の星は落ちる、開いた花の心のなかに落ちる、

いな、眞實な人間の心のなかに落ちる……

私共は、光の路は祈禱の路だといふことを知るであらう。

禮拜者は今、静かな足を家路へ向ける、

いな、極樂浄土へと向けるであらう。

彼等の顔は太陽の祝福を受け、黄金色に輝き、

彼等の唱へる聖き御名は、森林に響き渡る。

影

歌は終つた……一寸、待ち給へ、
聲の歌は形に過ぎない、形は消える、
歌の眞實な靈は、歌が終つても後に残る。
さうだとも、君の胸の波に反響して、
私の歌を震はせる、（それが私の歌の投げる影だ、）

君の胸の竦動に、私の遙か眞實な遙か白い靈が宿り、
その力で、君は塵と哀愁から高翔する。

……春は過ぎた、
春の薔薇や鳥は形に過ぎない、
私をもつと大きな春を、緑に光り夢に光る夏の森林に見る……
春が残す心の影が夢の林となるのだ。
ああ、私は春と成つて心の影を、世界を蔽ふ夏の森林に宿らせたい、
いな、私は靈の影を、靈の影を、將來の上に投げたいものだ。

禪 僧

彼に單調な好みがある、
宗教の超絶を信じ、
悠々と壯嚴の時^{タイム}で整理して、
彼は神祕の路を歩む……
これ以上、麗はしい單純がどこにあらうか、
どこにこれ以上現實的の繪があらうか、

彼以上、不變不易の存在は無い。
彼は信仰に額^{ひか}づき、
神祕の路を歩む……それが彼の萬事だ、
彼は何故かを問はない。
彼は表現外の觸感に觸れ、
沈黙の歎息^{なげき}を讀み、
その魂^{たましひ}と運命の前に祈禱する。
彼は宇宙觀に目覺め、
意志集中のため寂寞を極める一人格だ。
彼は自然の本能を支配して、
焰のやうに白光に燃えあがる。

人生の事變も、道德も、
最早や彼に無意味だ……
ただ、沈黙と祈禱の力を感ずるのみだ。

秋の歌

風の黄金鳥は歌の銀波にゆれる、
最も古い幻の歌は、再び、秋の夢靈に響き渡る。
時の悲しい妖術は光榮の魔城を築き、
哀愁は最後の笑を洩し、赤い木の葉は暴風雨となる。
うたふ曙の露から生れた私の魂は、
生命と言葉の大きな海に告別するであらう。

雨

雨は、夢のやうに生れ、
藝術として死んで仕舞ふ……
一瞬間に、
私の死と希望の幻が、即ち雨だ。
私の魂は、
雨の銀線の上で踊つてゐる、

南無三……私自身の悲しい歌の上で踊つてゐる。
花や木や山や、世界の諸物は、
雨の涙で、
その罪の生命を洗ふであらう。
私の魂は、
一層新しい生命へ、
いな、一層深い生命へ、
飛躍することが出来ようか……
雨は私に答へない。

森の彼方

はるかなる森の彼方に美人住む。

その胸に鶯巢籠り、

髪に戀と夢とをかくす。

日に九度、彼女は溪流にその姿を正し、

牡丹の花と共に、私を見、雲を見て微笑む。

私は絲遊の路を履み、罌粟の花を摘み、

彼女の安否を尋ねんとする。

彼女の影を譬ふれば、樅の木の影の如し、

その影に浸つて私は戀の春をうたふ。

彼女は樂器を取つてその絲を打つ、

彼女の聲は白鶴の聲に比較せらる。

星と微風の住家よりその首を延べ、

恰も西方の谷を眺める一枝の櫻のやうに、

長い流盼を私に與へる。

甘やかな愛人よ、美人よ、

私はお前と共に住み、

盡きない春の笑を永劫から紡ぎたい。

狂想

麥稈一把と、女の髪と、土塊で、

私の家は作られる……さうだ。

世界はいらない、

ああ、ほしいものは、眞實の詩の一つだ。

左の窓から、雲は飛びこみ、

目には見えない一群の、

高慢稚氣な踊り子が、

右の窓から踊りこむ、まるで潮だ。

いやはや、われは異教徒、歡樂極まつて心病む。

踊り子の拍子に乗って、立ちあがり、

『滄海變じて山嶽となる詩』を拾はう。

(ああ、詩の止む時道德ここに始まることを我は恐れる。)

身に捲く襤褸一着と、夢の斷片、

さては心にをのく夜陰の恐怖……

藝術の追憶で、空を眞赤に焼きつくしたい、

星を集めて、薔薇の座敷に撒き散したい。

私の魂は木の葉をくぐって、様々な假裝する……

墓場一つのために大地へと急ぐ。

日本の夜

馨しい紫色の風そよぐ日本の夜……

仙女の金の船のやうに、古風な月が

夢の海中を和かに揺れ始める。

(私はさく、月の船にかすかな美の歌を、

私はさく、その金色の衣のきぬすれさへも。)

愛と祈禱に燃ゆる千百の提灯は、

朧ろげな追憶のやうに巷を漂ふ。

日本娘の銀のやうな木履のひびき……

彼等は古代の胸から生れた小さな幽霊だらうか……

忘れられた千の空想を満たしに歸つてきたのではなからうか。

おお、古い戀と満たされない希望から生れた、

日本の夜の想像の世界……

日本の夜に響く戀愛の歌……

飢ゑた情熱と涙の三絃の音……

おお、闇と戀から出づる長い心の慟哭……

夜の女

彼女は秋の啜り泣を集め、
生命と生別する瞬間に於てのやうに、
その眼は憂愁のあらゆる姿に開く。
彼女の一生を、私は、十二月の黒い一夜に譬へたい。
ああ彼女は、生れる前すでに既に、涙の言葉を學び、
深夜を貫く星の聲は、
即ち彼女の悲しい光る聲だ。

無言の月光が、疲勞の薔薇に落ちるやうに、
不思議な闇が彼女の思想を包む。
彼女の顔は、雲と群る數千の夢をのぞき込み、
最も悲しい一つの夢を選ぶであらう。
ああ、彼女は光で見捨てられた流離の身だ、
幻が叫ぶ夜の陸土を歩き、
灰色の死に答へる……
彼女の恐れる所は男子の言葉だ、
冬の暴風雨のやうに、彼女はそれを避ける。
彼女の喜ぶ所は、他なし、死することだ、
夏の夜風が黄金の月に消え入るやうに。

空しい歌の石

雨が降ると私の夢はのぼる……六月の雲のやうに、
歌が、私の耳もとにむくむくと涌きたつ。
風より軽いその足拍子が、或は高く、或は低く、
波うち、私の眼は夢で燃える。

『私は何物だ。』

『奈落の底の幽霊だ、

夜闇の上に空しい歌の石を積みあげ、

焰のやうに踊り狂つて、やがては消えうせる。』

由井濱にて

海の放浪へ私は目覚める……

私の心に風がある、重吹しよきがある。

今日『非人間』になつて、私は喜ぶ、

海の哄笑わらひと舞踊まじりを見ることを。

ああ、海と風の歌を掬ひあげ、

憧憬の私の心へ投げいれよ。

私は水と空氣の一族となりたい、

私の魂は海の魂だ、動搖の魂だ。

海の心の驚異に捲き込まれたい……

海の煌きが私の歡喜だ。

風と海の光明すべてを集め、

夜闇の襲撃を防ぎたい。

影の一旅客

眼に見えぬ神の御手に招かれて、
そよ吹く銀の風の如く、聖き空をめぐる。
胸に秘むる一曲の歌……我等は祈禱の僕童だ。

われ等の歌は、亡びし都城の跡を知らず、
王国の哄笑も、我等の足を止めない、
我等の心は遠く、太陽、風、雨を友として、
聖なる大路をさまよふ……ああ、我等は影の一旅客だ。

月夜

追憶の酒を

歌の杯さかづきに注ぐため、

月はしのび込む、

香の霧を。

(霧に音楽がある。)

夜の歌を、月の歌を、

(歌に香気がある。)

私の魂は横切る……

腹が一杯で歌へない風のやうに、

迷路に彷徨ふのみだ。

(ああ、恍惚おだやかは穩やすに昇る。)

鳥や花や木は

甘い夜の潮を渡り、

白い埋滅チアリビヨンの塵墟じんこに

喜んで消えうせる。

向日葵

お前は情調から破れ出る。

私共は悲しくも経験に執着する。

お前の各原子は、生命の奇蹟に燃える、

如何に充實の生命にお前は生きるよ。

日光に生きる熱情家、

誇りある青春の表象、

お前は顔を寒氣に向け、影に向けようと思つたことがあるか。

お前は舞上る色彩の抒情詩だ、

無言の歌にお前は飛躍する。

お前は生命の意味を呑みほし……

ああ、驚くべき自意識、

ああ、壯大な存在感。

雀

一幽霊、

沈黙と影のなかから再び踊り出たもの、

前世の色彩と追憶をあさる獵人、

彼は同じ夢と人情を、ここに再び見出すことが出来るだらうか。

彼は生きる力の把持者、

各瞬間に献身するもの、

彼の一瞬間は人間の十年に比較されるであらう……

各瞬間は彼を唆かし、慰め、驚かすに相違ない。

彼は神經の幽霊……

彼が呪詛するならば、

すべての心を以て呪詛するであらう、

彼が後悔するならば、

すべての體を投げて後悔するであらう。

ああ、私も彼と同様に、同じ生命の感動を味ひたいものだ。

藝術

そもそも藝術は、

蜘蛛の巣のやうに、香の空中にかかる、

柔かで生き生きと、音楽にゆれる。

(人生に浸潤する藝術は悲しい。)

その音楽は瞬間の緊張に死ぬる、生きる、

暗示がこの生命だ。

藝術に美と夢の『探求』はない、(なせといふに、)

藝術は夢、美そのものに外ならない。

(私共は理想や、問題や雑談やに疲れ切った。)

現実の黄昏たがれに光る蛾一疋だ……

残忍な瞬間の餌食となつて死なねばならない。

藝術は創造の驚異、(さう私はいふ、)

衝動の金線に踊る、

光と影の小鬼エルフ……

藝術の美と悲劇はきらめき渡る。

古鐘

千年の古き歳月に震動しつつ、

(その音は信仰のやうに暗い、)

哀哭し、哀哭して、私を求め。

(私はとつくの昔に信仰を失つた、)

侮慢の聲で、沈黙を破り、

(必ずしも無慈悲でないが重苦しい音だ、)

夜と殿堂の黄昏たそがれから

私の黄昏の心の中へ響き込む……

都會詩の遊戯終つて、私は静寂に入り、

私の思想は灰色に、疲労し終つた。

ああ、悲哀と黙想に懶く、

私の追憶は遠く塵の世界を離れ、

私の心は微かに鐘の哀哭に答へる。

私の歌

私のは進歩を否定する歌、
形式で律せられない無音の歌……
生命いのちの生れ、
避けることの出来ない偶然、
創造的本能の上昇。
歌よ、お前は現象だ、仕遂げではない。

言葉に形造られる時、歌の精神は衰へる、
構造の力を失つて、始めて、歌はその心力を得るであらう。
廢頽は進化の轉換期だ……
秋の終る時、何といふ破産を自然に見るであらう。
ああ、新しい力は北方から来る……
冬は神祕を行はんが爲め、沈黙のうちに物思ひする、
自然をしてその負傷かち、靜かに回復せしめねばならない。

私はいふ、美の統治は終つたと。
私はいふ、不完全のうちに、荒廢のうちに一層の心力が宿ると。
人生の悔恨くげんに、何といふ現實があるであらう、

何といふ暗示が、何といふ報償の可能性があるであらう。
心的變化に、ああ、何といふ詩歌があるであらう。

歌よ、お前は風だ、無死の生命いのちと時の歌タイムひ手だ。

お前の近代的衝動に、何といふ新しい發奮があるであらう。

私のは進歩を否定する歌だ、

形式で律せられない、言葉のない歌だ。

支那

私はお茶を茶碗にそそぎ、古色蒼然たる堯舜時代を考へ、
青龍刀の君子國を夢見るであらう。

古金色の月は下を見詰める……

支那の月よ、お前は知識と詩歌に厭きあきして居るであらう、

お前の顔は秋の顔だ、柔かい歎息なげきよりなほ柔かい、

お前は、甘い死よりなほ甘い煙滅タバコの表象だ。

阿片の黄な臭氣に、永劫の自由がある、
狂喜と忘れられた戀愛の耳語オモムネとがある。

阿片室では、時の鋭い牙も力が有るまい、

罪惡つみは愉快な空想の胸に眠るであらう。

體からだを斜しやに横たへる阿片吸を御覽なさい、まるで倒れかかった五重の塔だ、
全身を舉げて、白い睡眠ねむりに質入れして仕舞つたのだ。

ああ、ああ、耳に響くのは叛逆の叫びでもあるだらうか、

さうでない、長い煙管きせるを啣くはへる大官が、

落ちる木の葉のやうな奴隸を従へ、

千箇の旗や笛や大鼓で、

大道せましと練つてゆくのだ。

私はもう一度、遠方の歌のやうに力の無い支那美人が、
蝶蝶の肩をゆすぶりながら、

潮と集る群集から、禮拜の眼で見送られる様子を見たい。

ああ、私はもう一度、森林の心のやうに寂しい支那音楽を聞き、
戀愛わいあに叫ぶ冬の風のやうに、心一杯に喚わめいて見たい。

蓮花

私の心に風の叫び、
追憶の思想は夜で黒められ、
私は幻の道を歩き、
沈黙の海へさしかかる。

祈禱よりも白い蓮花が
眼前に顯はれ、夢の如く寂しく背高く、

雲間を落ちる日光を受け、
花は天國の憂愁を微笑む。

その美は燃え切った淨火の如く、
花瓣は星の歌をうたひ、
愛と望がその心に宿る、
花が朝の祝福から來たことを私は知って居る。

蓮花は白露の聲で語る、
『憂愁の門こそ天國の門……
涙の代價を拂ってその門をくぐり、

沈黙の火を浴び、お前の魂を白くせよ。』

蓮花よ、聖き女神よ、私は御前に跪く、

聖き愛の女神よ、聖き觀世音よ、

輝く心の女王よ、憂愁の女王よ、

私を海岸に導き黄金の船に乗らしめ給へ。

廣重に與ふ

君は自然の一角を力説する……

危機一髪とでもいふ點を、愛の力で描いてのける、

新しい美の創造者だ、

自然と人生を改造する巨腕が君にある、

水、山、木や人間を整理する畫家だ。

君の藝術には、

虹のやうな大膽な飛躍がある、
音律がある、狂喜がある。

私は君の繪を眺める……

恰も創世の一週間を終り疲れた兩腕をぐつと伸ばす神様のやうに、
繪のうしろから、君の顔が輝く、
そして微笑みながら私にいふ、

『ここに大きな波をうねらし、山を一つ覗かせる、

又そこに大雨をざつと降らしてみる……

かういつた調子で、僕の繪は出來上る……君も何か描いてみないかね。』

ああ魔法使だ、

浪漫主義者だ、

自然の偏心性を愛する反逆藝術の所有者だ、

君は未知の世界へ突貫する勇者だ。

君は再び私にいふに相違ない、

『さあ、今現實の絶頂に立ち、

もう一度想像の羽翼はねをのばし、

藝術の大飛躍をやつて見よう……君、僕について來れるかね。』

歌麿の美人

それを線の美だといふのは餘りに平凡、
だが線は古くて、靈化して香氣となつて、
(その香氣こそ生死を翱翔して永久の靈となつた香氣だ、)
夢の手細工、絲遊のやうに
自由に浮動して居る……

歌麿の美人は流れる微風の美しさであらう。
その線には戀愛の息吹が通つて居り、
私の心を包み、遂に幸な捕虜にして仕舞ふ。
官能的だつて……人にはさう見えるかも知れない、
だが、この官能的な女が神聖な戀愛の言葉となつてゐる。
今日私は、静かな夕方の薄暗いなかでその女に對してゐる。
その女が今にも霧散して仕舞ひさうな氣がしてならない。

兩國の花火

空を破る花火の音、

闇を一層黒くする閃光。

空を破る音、いな瞬間の光、

生命が死と變ずる瞬間の歌。

瞬間でも顔を空に向け、陸を忘れ、

風と雲の騎者となつてみたい。

人生の混乱からすつかり離れ、
星の間に歌を見出すことは喜ばしい。

花火の音、

ぱつと消える閃光。

ああ、私の魂の音だ閃光だ、

死の苦痛で下界の人間を喜ばす私の閃光だ、

いな、私の魂の破れる音だ。

歌の道

歌の道は静かな薄明なれ、

蘆の歎息に乗つて來る。

目に見えない仙女と稱へん……私は知る、君の家は風の懷中にあることを。

君はさまよふ雲の幽靈なるか……私は聞く、君の言葉なき雨の憧憬を。

君の歌は灰色にて悲し、されど君は、光線の喜悅を知らざるにあらず、

げに、君の歡喜は、背後より人を驚かすことなり。

ああ、君は星の神祕を尋ねる胡蝶なるか、

雲の古城を廻る孤獨の鳥なるか。

私は力無くして、君を支配し得ず、

ただ薄明の日、

ここ薄明の樹陰にて、

君にあこがれ、君の驚異に撃たれんことを冀ふのみ。

ああ、君は千の思想と百の姿を持つ幽靈ならん、

願くば、私に古く新しい詩歌に生きる祕密を教へ給へ。

林中

林中に坐つて私は最早や野蠻人にあらず、
肉感の苛立いらだちも私の所有にあらず、

今日風に從つて彷徨ふ……ああ、何等の奇蹟ぞや、

私の詩心よ、君は飛ばんとするならんが、暫時しばし私と共にあれ。

私は鳥とたがひの傳記者たることは、げに幸ひなり、
鳥は私の歴史を読み、私は鳥の歴史を読む。

枯れし花より星生れるといふ神話こそ現實なり、
私死せし時、君、私の靈の存在を、熱烈の花椿一枝に尋ね給へ。

偶感

私は君を空想して

不死のロマンスなりと思ひ、

君ぞ盡きざる時の歌なりと宣言しき。

君は、時世後れなりと私をあざ笑ひ、

ちと意見を變へ給へと助言しき。

君はロマンスや永劫を口にせること無く、

水に映する光線と雲こそ君の生命なりと云ひ、

變化は死滅にあらず飛躍なりと語るなり。

君は消えゆく時に永劫の姿を認め、

『人生だ、人生だ、ただ人生あるのみ』と呼ぶなり。

ああ、君の言葉は眞實に答へる解放の叫ならん、

心の聲調にて君の濟度始まると信するならん。

とつくの昔に所謂文學を捨てし君の態度こそ尊けれ、

私は嘗て君を古詩一卷なりと思ひしことを考へ、

如何に私の愚物なりしかを耻づるなり耻づるなり。

詩人

薔薇はその美を食つて死ぬ。

詩人はその詩を糧とする……

さうだ、瞬間に生きる肉が彼の詩だ、

瞬間の魂と肉に、何といふ悲痛な叫びがあるであらう。

(ああ、現在の生命に生きる瞬間よ、

お前は過去も将来も知らない、

お前の生命は、前瞬間の死から生れたのであるか。) 薔薇はその美を食つて死ぬ。

各瞬間の死を弔ふ吟詠が詩人の言葉だ……

彼は瞬間の生命の詩人だ。死即ち誕生を體驗して、

彼は人間生活の戦慄へ目覚める。

薔薇はその美を食つて死ぬ。

詩人の肉と魂は亡びて骨となり、

難船の帆柱のやうに、灰色の敗殘に漂ふであらう。

追憶

扇子を持つて、小さい喜びを持つて、
君は舞踊する……
君の赤と白との着物は、
落ちる夢の木の葉のやうに閃く。
君の胸にただよふ銀の香は、
禁止の道からそつと這つて来る。

君の仙女の足踏は、とんとんとんと、
黄金の追憶を響かせる。
私は君の黒い眼に、
私の充されない青春の思慕を読み、
耳語と金剛石の心を捧げて、
歎息のやうに、君の面前に跪く。
ああ、戀愛の幻よ、私の追憶よ、
君は歸りくる私の靈でなくて何であらう……
さうでないか、語れ、語れ。

右と左

青い山は私の右に、

黄色の日光ひかりは私の左に、

笑ふ風はその間を過ぎゆく。

白い川は私の左に、

赤い花は私の右に、

笑ふをどめ處女はその間を行く。

雲は私の右を帆走り、

鳥は私の左を飛び降る、

笑ふ月はその間に顯はれる。

私は左へ向いて詩の谷へ、

私は右へ向いて戀愛の森へ……

だが、家路へとその間の道を急ぐ。

朝 顔

太陽の最初の呼吸を感じつつ、
君は、急に、暗黒の部屋を破る。
何たる犬のやうな、豚のやうな嗅覚が君にあるよ。
君は重要なざるは、つばの又から、

君の大きな嬉しい顔をさらげ出す。
何たる夏の朝の嘆美が、君の顔にあるよ。
餘りに嬉しいので涙を流す君の顔……
太陽に魅せられて大きく開いた唇の顔……
柔和でしかも粗野な顔……
崇拜のすべてが語られた上は、死んでも嬉しさうな君の顔……

蟬

老いた魂たましひの何といふ苦悶であらう、
その聲は涙で、その涙は即ち聲だ。
お前は胸を張裂き、何といふ忘れ難い悲劇を語るであらう。

火でその胸を焼く森林の歌ひ手よ。
お前は世界に、それとも、私の愛の生命いのちに叫ぶのか、

お前の單調の叫びは、私の悲しい歌の叫びであるだらうか。

生命の悲哀を讀む靈たましひだけが、お前の胸の痛みを知る。
世界は亡び、人生が死の勝利を得るまで、叫べ、叫べ、
信仰の悲劇を體驗して、私共に死を贏たしめよ。
悲しい信仰の歌ひ手よ、たった一つの歌の歌ひ手よ、
生命いのちを泣きつくせ、古い涙の夢を焼きつくせ。
ミン、ミン、ミン、ミン、ミン、ミン、ミン、ミン……
ミン、ミン、ミン、ミン、ミン、ミン、ミン、ミン……
ミン、ミン、ミン、ミン、ミン、ミン、ミン、ミン……

瀬戸内海

幽かな思慕の酒水ツインはなみなみと流れ、
春陽四月の微風かぜは紫色に煌く……久しく忘れた、親しみのある光だ。
瀬戸内海トウライトの薄明界に觸れ給へ……
私は無聲の歌を聞く、
飛躍する私の魂たましひの歌を聞く、
千年も以前に夢見た私の夢の歌を聞く、

仙女の世界の夢を聞く……ああ、瀬戸内海の美はしさよ。
私は今日この仙女の海を帆走る、帆走る、
私を迎へる島々を離れて帆走る、
歌うたふ大空へ帆走る。
（ああ、水夫がうたふ人生の歌を聞け、
ほらほら、島が君に告別する！）
白い魂たましひの鳥よ、白い戀愛の力で私の心を舵取れ、
ここは私の夢の海だ、ああ、美はしい瀬戸内海が流れる。

京 都

香と祈禱いのりの都、京都は霧から生れ、
半ば消えゆく夢のやうに、躊躇ためらふ。
忘れられた塔から響く、鐘の古歌は、
鴨川のうたふ黄昏たそがれの歌と一つになる。

若い女は、半ばの耳語ささやと半ばの戀だ……

踏迷った月光のやうに、年若い、
熱情の春をかるがると運んで、
神様がお築まきになった街で羽ばたく。

『一寸お待ちなさい』と、私はいふ。

女はお白粉つけた首筋をまげる……ああ、美しい。

『いえ、有難う、またの日に』と、女は答へる。

ああ、薔薇の呼吸いきのやうな女の微笑ほほえみ。

大 佛

古い悲哀の死の歌は、歎息の霧で、もろもろの御佛達と樹木を包む。

(嗚呼、鎌倉全盛時代、今何處にかある。)

永劫の大佛は静寂の上に坐る……

この無言の聖者を、聖き完全な勝利者を、私は禮讃するであらう。

數多き巡禮者は、祈禱の白衣を着け、

灰色の影の招に答へ、悲しい海を渡る燕のやうに、

夢を吟誦しつつ此處を飛びかふ……

彼等は人間の廢墟に信仰の殿堂を建てようとする幽霊だ。

ああ、人間世界を全く失はれたものとしてはならない、

時代の歎息から、佛達や古い歌を救ひださう、

光明の家を地上の祈禱の上に築きたい、

ああ、涅槃の空と信仰の尊い戦慄を世界に與へたい。

『南無阿彌陀佛』と私は祈る、私は祈る。

私は今地上に見る、大佛の影と私自身の青白い影を……

月は黒い黄昏を破り、無聲の木の間に揺れる。

私は頭を垂れ、永劫の小路を散歩する……
大佛と月と私の三人は、徐に静寂の恍惚に溺れゆく。

夏は過行く

情火が盡きた空しい酒杯……
悲しい風聞ふうばきが今日木の間を過ぎる、
河がつめたい風を運び、
波は哀愁に震へる、
蟬の熱歌長歌はどこへ消えたであらうか。

芝 金

二百二十日も過ぎて二日目だ、

白い単衣ひじろでは薄ら寒い、

庭は眞黒に瘦せ、一輪の朝顔が庭を赤く染抜く、

灰色の太い雨がざあざあと、水溜へいくつも落ち、

太い雨と太い雨との間から、樹木が見え、

庭の面から、下へと擴がるもう一つの違つた世界を、私は眺める。

私は机にもたれ、太い雨と太い雨との間から、地下の世界へ入らうとする、

『もゆる想の苦さに……』と地のすつと下から、しぼるやうな芝金の聲が聞えて来る、

私の想像は、簾を深くたれた薄暗い部屋を描き、

顔はとんと見えないが、歌をうたつてゐる一人の女を描く、

雨はぱつたりと止む、庭の水溜は間もなく消える、

一筋の太陽の光線がさつと落ち、墨色の空は黒光つて来る、

白い一つの蝶が、どこやらから飛んで来て、

その後を私の心に追掛けさせる。

『お父さん、蓄音機がから廻りして居るぢやありませんか。』

『さうか、もう一遍機械を掛けて呉れ』と、私は振りむいて子供に云ふ。

足の音楽家

『カラコロ……カラコロ、カラコロ!』

私は書齋で獨り、夜陰を破る女の駒下駄を聞く、

(椽の下で寂しい一つの蟲が、鳴いてゐる、)

『今時女の駒下駄の音……さては幽霊かな』と、私は思ふ。

人間の本能がまだ盡きないで、

渴望の美を地上に、さがし廻るのであらうか、

黄昏ダスクの國から遣つて來る魔の蝶よ、

お前は刹那の歡樂を満すため、再び地上に歸つたか、

移氣さまよひなお前の彷徨の心は懐しい、

出來ることなら、遠慮なくここに止つて、

傳説と記憶の表象となつて、私の人生に靈氣を與へて呉れ、

私はお前から、生と死の比喩アレゴリ譚を聞きたい。

物凄い色彩の圖案を見たい。

『カラコロ、カラコロ……カラコロ!』

私はお前を足の音楽家と呼ぶ、

お前に、物質的人生を犠牲にして得た單調がある、

靈的禁慾主義の捧げる氣高い祈禱いのりがある、

お前に、最後の進化期に到着した寂莫さびしがある。

私はお前の寂莫に觸れて、一片の土塊つちくれから眞實まじの自由と變化したい。

沈黙の鳥

風や世界の作られない以前に生れた沈黙の鳥よ、

お前は、涙や戀よりもつと古い。

笑と人生を知らない寂莫の幽霊よ、

思想の空から、星の空から飛んでこい、

私はお前を歓迎する。

神祕のやうに、色白く、遠ざかり、

人情や聲に厭いた沈黙の鳥よ、

神祕の兄弟よ、

ああ沈黙の鳥よ、私はお前と共に、

時タイムと悲哀の無い海の彼方へ帆走りたい。

沈黙の鳥よ、永劫と空間の住者よ、

私は、曙光あきの生れない以前の世界に生きたい。

ああ、私は柳の小枝のやうに言葉を失ふ、

(柳の戦慄は即ち黄金の歌だ、)

私は言葉の無い蓮花はすのやうに聲を失ふ、

(蓮花の杯さかづきがぱつと破れる、)

それは空中の舞踊まじりを呼ぶ叫びだ、)

ああ、沈黙の鳥よ、

私はお前を永久に歓迎する。

幽 靈

額の髪をかき上げる手の様子で、

(思想の枯葉のやうに、彼女は髪をかき上げる、)
微風かぜの路を求める眼つきの工合で、

あは……私は彼女をよく知つて居る、

私の古い愛人ラブなもの、いつの頃からは知らないが。

(死んだ思想の木は揺れる揺れる。)

銀色ゆるやかな彼女の耳語みみごに、

私は血族ちまねの消息を聞くやうな氣がする……

何が何だか知らないが、忘れられない。

『あは、時の幽霊、真夜中の幽霊だな』と、私は叫ぶ。

(時計はチンと一時を打つ。)

信仰の古い言葉のやうに、彼女は耳語みみごく。

(古い小川の信仰は流れゆく流れゆく。)

青春

『これは結構な家だ。』

「信仰」の畳か……綺麗だね。

床の間に、「平和」の柱が付いてゐるのも、僕の氣に入つた。

冬になると、「人情」の火鉢で手を温め、「涙」の栗を焼いて、「微笑」の風味を味ふのだね。

夏は、「禮讚」の風が吹通すことだらう。「感激」の暴風雨もここから眺めると、一風流だ……

料理番は居るかね、

一寸、呼んで貰ひたいが。』

『私は料理番ですが、何か御用ですか。』

『何といふ名前か、御前は。』

『「忍耐」……さう、さう、「忍耐」が私の名前で御座います。』

『御前の得意の料理は、何か。』

『はい、まづ、「青春」の吸物位で、御座りませうか。』

綱渡り

彼は他人を考へる時間が無い、
自分自身であることが、エゴイストの藝術だ……
何といふ熱中を彼は仕事にもつであらう、
熱心が極まる時、彼は沈黙に入り、

言葉を失ふ時、彼は自分自身の人格を作る。
踏外さない彼に、何といふ行爲の節約があるであらう。
彼は祕密と方則の所有者だ。
彼は人生の遊戯者でない……現實その者だ、
彼を眺めて私共は空想と夢を見捨てる、
さうして近代の苦痛を感じる。
彼と等しく私共も、生か死かの舞臺に立つ藝術家だ。

微風

微風は知らないうちに來る、
私の側で歌うたふ。
微風がぱつと止んだ時、
私のさすらひの歌も止むだらう。
微風は美人のやうに來る、

にここにこと私の側を吹く、
私を見上げ、微風はいふ、
『薔薇かげに、鳥と人から隠れよう。』
哀しい心の微風は吹く、
私の側で歎息する。
私は黄金の生命を物語り、
共に心の宮殿へと飛んでゆく。

私は太陽を崇拜する

私は太陽を崇拜する……

その光線ひかりのためでなく、太陽が地上に描く樹陰こかげのために。

ああ、喜ばしい影よ、まるで仙女の散歩場のやうだ、

其處で私は、夏の日の夢を築くであらう。

私は女を禮拜する……

戀愛のためでなく、戀愛の追憶のために。

戀愛は枯れるであらうが、追憶は永遠とこしへに青い、

私は追憶の泉から、春の歡喜を汲むであらう。

私は鳥の歌を謹聽する……

その聲のためでなく、聲につづく沈黙のために。

ああ、聲から生れる新鮮な沈黙よ、『死』の諧音よ、

私はいつも喜んでそれを聞くであらう。

飛行機

芭蕉は石山の石より白い秋風を見たが、
私は今、地中海の波より青い秋氣分を味つてゐる……
私は廊下に寝そべりながら、瑠璃紺色に高い空を眺める。
金比羅参りおんひらひらの蝶を見た男は一茶だ、

私は青い空中の地中海に入り亂れる赤蜻蛉飛行機を眺め、
光琳も抱一も發見することが出来なかつた、この畫題に感謝する。
私は廊下で日向ぼっこしながら、私の秋氣分が今日始めて澄んで行くやうな感
じを持つ……

私の寝そべって居る廊下の下で、一疋の蟋蟀が聲細くかなしげに泣く。

火宅を出でよ

露と燃える希望の女王、伊邪那美神は、
如何に始めて、愛の浅霧の浮橋から、
光榮の歌を風に流したかを考へ給ふ。
其時、如何に高く太陽と月が飛び、
木や川が僚友の歡喜にむせんだであらう。

女よ、人生の火宅を出でよ、
人情の廢墟を去り、心の負傷を忘れよ、
諸君の哄笑が山嶽を動かす所へ、
波が踊つて、星の音樂に答へる所へ來れ。
希望の破産と戀愛の塵を忘れ給へ、
雜草の戰慄は戀よりも懐しく、
如何に人間の希望が鳥の囀よりも劣るであらう。

風の路

花瓣と花瓣との間に小門あり、

私はこれより大きな想像の世界に入る。

私こそは變通自在の飛乗太郎なり、

神出鬼没の天狗なり。

ほら、匿れる、ほら、顯はれる……たれか私を捕へ得るものぞ。

私は現實に即して物質論者なり、

想像の住者として、ナムニフレセンス遍在性の表象なり、

星を見て泣き、花を眺めて笑ふ有神論者なり、

人間性を得て神の寂寞を理解するものなり。

私と共に自然を禮讚するもの、來れ、

ここに捧げる一挺の蠟燭あり、

それを燃して、

共に風の過ぎゆく路を照らすべし。

空中の歌

すべて色彩、すべて音楽、
すべて感觸、

虹の如く、

卒然として歌が

影の胸にたちのぼる。

ああ、世界は變じて歌一つとなる。

解放だ、生命だ、
生命だ、

神經の衝動だ、

思想でない、眞理でない……

不思議に、

歌は藝術を

吸出し吸込む。

然し急に歌が止むと、

ああ、歌なき世界は悲しい。

木の葉

沈黙は破れる……自然へと
私の靈は帆走る、
花や鳥やに出會ふため、
生命の歌を額にのせて。

孤獨となつて歸る時、

ああ、私の心は痛む、
私の消えた熱情は
戀愛の廢墟に横はる。

ああ、私は木の葉、
失意と希望に吊されて、
世の想像と幽靈に
結付き、かつ震へる。

豎琴

私は草の上に豎琴を置いた……

雲は飛ぶ。

私は微風と共に、

雲をはるかに追ふ。

私は飛んだ、疲れた、草へ再び歸つた……

豎琴は私の手の觸れるのを待つてゐる。

愛人よ、豎琴よ、私は二度とお前から離れぬであらう、
決して、二度と。

私の豎琴よ、お前も私も

最早や月下の憂愁を歌はないであらう。

お前の絃も、私の魂も、

今黄金色に酔つてゐる。

おお、月よ、豎琴よ、私は

更けゆく夜に人生と世界を忘れたい。

(彼方の果樹園で、

花が孤獨の香を呼吸してゐる。)

鶯の頌

たつた一つの歌の創造者よ、

お前は勝利を、狂喜を、藝術をいつも同じ言葉で語る……
何といふ神祕だ。

私はお前よりも餘計な歌と夢を二つ三つ持つてゐる、
だが、私は歌はない前から慄き、躊躇する……
悲しいかな、私の音楽は私の命を奉じない。

お前は歌を突進させる……何といふ不注意な態度だ、

空中へ歌ひのけ、其歌をけろりと忘れて仕舞ふ……如何にもお前は豪氣だ。

お前は、歌の順番を待つてゐる外ほかのものどもを考慮しない、

お前は歌ひ歌ひ、自分の歌だけの路を推しすすめる、

(外の鳥や詩人は氣の毒なものだ、)

ああ、何といふ愉快な野蠻の一行爲であらう。

お前の歌の學術的意味を、私は知らない、

お前は鳥であるのみで無い、確に詩人だ……

ああ、お前は韻文學の謀反者だ、

何といふ新しい言葉をお前は發見したであらう。

お前の歌は、私共人間の生命いのちと藝術をかき亂す、

お前の聲に感動の蕩盡がある、

お前の生命に歡樂の驚異がある……

お前は人間を、お前と同種族のものと變じて仕舞ふであらう、

單純と力の一表現として仕舞ふであらう。

お前の歌は止み、お前は飛び去る、

ああ、どうしてお前の仕事はそんなに早く終るのか、

お前は人間の歌に、お前の歌の將來フューチャーを認めたのであるか。

ああ、お前は暗示だ……何といふ藝術の一斷片であらう。

歸去來賦

西の都に告別して、
東の海へ歸らうよ、
太陽が最初に接吻する東の島へ歸らうよ、
甘い甘い生れ故郷へ歸らうよ。
いざ、憂愁を山に横たへ、
すべての歌を鳥に與へ、長く長く眠らうよ。

森を動かす風を聞き、私は目覺め、
大空の雲へ、生命の喜びを口笛吹かうよ……
雲の生命は私の生命であるだらう。
思ふに、愛人は背高くなつたであらう……
最後に別れた時、二寸も私より低かつたが。
提燈の月を、藤の花の間に點し、
平和のやうに長く垂れる藤の花に、忍びより、
たがひの背丈を測らうよ。
彼女が勝たば、七つの接吻を拂はうよ、
私が勝たば、七つの接吻を受取らうよ、
どの道、接吻は私のものになるであらう。

そして私等二人、聖者詩人の像の側を歩き、
『人生はただこれ戀愛』の一義を誓はうよ、
ああ、戀愛と菊一株で、永へに永へに生きようよ。

琴の彈奏者

肉と戀愛の一片……その存在を思ふと、
暗明の夜が暗明の香氣となる。

接吻のやうに、その指輪がぱつと光る、
その指が波のやうに、暗明の絲の上を流れる。

ああ、彼女の心に、夜に、諧音の微風……
夢の痛みに消えてゆく音楽の幽霊。

七月の日本

幽靈のやうに白く、
輝く日没の幻想。

日は薄明るい香に
みらみちて飛ぶことも出来ない。

乳色の日本の七月は、
いふに云はれぬ夢の藝術^{アート}。

お前は知つてゐよう、青々と深い海原を、
廣漠たる平和の海を、

空中にかかる愛の提燈のやうに、
日本は歌の苦痛に揺れる。

奇怪な雪

あは、奇怪な雪だね、

ははは、面白く踊るわ、

お覧、可愛い足をあんなに上げて。

死は甘い、それは確か、

笑ひながら死んで行く、

あんなに綺麗な歯を見せて、ははは。

小池へ消える雪と一緒に、

私共も心中すると假定する……

これぞ奇怪な最後であらう、ははは。

戀の消える音楽のなかへ

死んでゆく位、奇怪な最後はない、

お覧、雪と音楽は消えてゆく。

ははは、臆病者だわね、

怖くて死ねない……

まだ小さい我儘が戀しくて、ははは。

悲哀を残さずに死んでゆく
雪は、ははは、奇怪だ。
私の愛人よ、お前は臆病だわね。

薔 薇

私は思った、立腹した姿が薔薇によく似合ふと。
『あなたは美はしい』と私がいふと、薔薇はますます短氣になるのみであつた。
私は雨や風が、彼女には重荷過ぎるといふことを知つてゐる。
私は再びいつた、『何かいやな事でも起つたの。』

薔薇はいつた、『あなた御承知ぢやありませんか……私の疲れた生活を。』

こんな見悪い着物で、御存じのやうに田舎ものですもの、
鳥や蝶と違つて、

世界とはまるで没交渉……ああ、いやだ。

わたし年を取つたら、何うなると、あなた、思つて。』

私は薔薇に答へた、『私は少しもあなたに同意しない。

その着物で結構、田舎物どころか……どうしまして、

誰だつても、あなたと一緒になら、舞踏會へでも何處へでも行きますよ。

年のことを仰るが、あなたは昨日生れたばかりぢやありませんか。

そして、私は年齢なんか、てんで信じませんよ。』

私はますます彼女をいら立たした。

彼女は敵對の眼で私を見詰めた。

彼女の態度は異様であつた……

地上にかつばと身を投げ、そして顔を埋めた。

坂道

後に霧夜の月を背負い、

私の足は、冷えきつた大地の沈黙を破りながら、坂道を上る。

地上に映る大きい自分の影を眺めて微笑み、云ふ、

『これはゴシック式の體だ、二つの耳は、巴里の夜陰を覗くノートルダームのガーゴイルだ。』

私はある晩餐會を終へて、今家路を急ぐものであるが、

面前の星を目掛けて進む、中世紀の騎士のやうな氣がする、

私の體に、一段勇氣がりんりと鳴る。

向から坂を下り私を通過するものがある、

私は冷笑の一瞥を彼に與へる、さうしていふ、

『はは、彼は撃退されて逃げる敗殘者だな、憐れな弱蟲め。』

私は坂の上から、右へ廻り、自分の家を知らぬ顔して行過ぎる、

又戻つて、その前をすつと通過ぎ、心の中で思ふ、

『私の家は此處でない、外に何處かもつと立派な家があるやうな氣がする。』

さうして私は高々と背伸びし、頭を上げて、天上の星を眺める。

棕櫚の葉

棕櫚は大きな手を、によつと出してゐる、
雨に濡れても、雪に押されても、風に吹かれても、一段出した手を引込めない。
小さい時、誰が手を出すやうに教へたか、
大きくなつても、お前は、なぜ、手を引込めないか、
お前の開けた手には目的があらう……聞きたい、語つてくれ。

『馬鹿な奴だ、棕櫚の葉は千手観音、どつこい、お前の手ぢやないか。
あの澤山の指を、お前は働かせねばならない。
働かせるのだ、働かすのだ、いいか、
衆生済度などと、大きなことを云はないで、
何でもいいから動かすのだ……せめて蠅たたきとなつても……』
私は棕櫚の葉をぢつと眺め、
あれが私の手だらうかと、考へてみる。

苦行者

私は、『時と空間』の門前に立つ。

王國の番人は殘忍だ、臆病だ、注意深い、

彼は八方に目をくばつて、入國者を吟味する鬼だ。

『私が王様に捧げる進物は

詩といふ寶石だ……入國させて下さい。』

『王者の希望するものは詩でない、戀愛だ……』

薔薇の耳語みみごゝりを聞くといふ戀愛の鳥だ、

小川の鏡に姿をうつすといふ戀愛の鳥だ、

青い空へ飛上るといふ戀愛の鳥だ……

この鳥も、哀憐の森で生れる盲目の奴ではない、

二つの眼が、理解の光澤ひかりでびかびかする奴を持って来て、

「時と空間」の王國へ入りなさい。」

『私は戀愛の鳥を持たない、それでは入國は許されないだらうか。』

『お前が、持つて来たといふ詩を捨てて仕舞ひ、

七日七夜の野宿を張るのだ、

さうしたならば、私は、人生の苦行者が入國を希望すると

王様に取りつがないものでも無い。』

新年言志

解體して抽象に入りたい、

私は餘りに長く具體の鎖に繋がれた、

人は私に『言葉の使用に吝嗇過ぎる』と非難する、

人は私が精神の充實を努めてゐることを認めぬかも知れない、

人は人で、私は私だ……

それでよいではないか、

一錢銅貨を街上に散亂させた所で、それが何の價がある、

私は古金を時間と空間の枝に飾りたい、

ああ、抽象への突撃だ、

現實の火烟で詩の暗黒を照らすことだ、

私のみが抽象と現實とを合一させることが出来る、

洞察者となるのが私の眞の仕事だ、

他人の物に核心を見る力を得させるのが私の仕事だ、

豫言者となるのが私の仕事だ、

他人に將來の路を示す案内人となるのが私の仕事だ、

さあ、人生を掘つて掘つてその根柢を極めよう、

深く根ざしてゐない花や樹木が、どうして神の面前で笑ふことが出来よう。

野口米次郎
トツレクツフ

- 第一編 芭蕉論
- 第二編 光悦と抱一
- 第三編 松の木の本
- 第四編 能樂の鑑賞
- 第五編 米國文學論
- 第六編 光琳と乾山
- 第七編 歌麿北齊廣重論(菊版寫眞三十枚入)
- 第八編 春信と清長
- 第九編 寫樂
- 第十編 與謝野蕪村

此叢書は著者の定本全集也約廿冊の豫定
四版上製日本繪二枚 用紙は英國上製フロゴ

大正十四年十二月一日印刷納本

大正十四年十二月三日

第一刷千五百部發行



Daitchi shobo

野口米次郎定本詩集

第一卷 表象抒情詩

定價一圓八十錢

著作者 野口米次郎

發行者 長谷川巳之吉

印刷所 溝口印刷所
製本所 黒岩製本所

發行所 第一書房

東京市芝區高輪南町六番地
振替東京六四二二三
電話高輪一二九四

慶應大學文學部教授 シエラアド・ヴァインズ著

詩人野口米次郎

四六版總ヶロース面入
二百五十頁・口繪四枚
定價一圓八十錢、送料十二錢

野口米次郎氏は今年の誕生日を以て満五十歳になる。人間の壽命を五十年と計算する世俗の習慣が
ら見れば、彼は正に人生の絶頂を極めた人である。然し彼は將來に生きる人である。「上るに路が無
いもう一つの山」を眼前に認めつつ、更に新しい飛躍を計畫する人である。「私の心のなかで勇氣が
凜凜と鳴つてゐる」を彼は歌つてゐるが、彼は常に靜肅なる情熱に潑刺してゐる人である。従つて
眞に彼を理解する者にまつては、所謂五十歳誕辰祝賀會の談笑の間に、意味ある彼の過去を形式的に
紀念することは、乃ち將來の人ヨネ・ノグチを遇するの道ではない。彼が此の種の祝賀會を無意味と
する理由は、親しき我々の容易に同感し得る所である。従つて我々は最も意味ある紀念を彼に與へな
ければならない。そして彼をして更に將來の努力を誓約せしめなければならぬ。

然し人生の絶頂に立つ五十歳の彼は、過去を顧みて苦痛と歡喜の歴史を逆に讀むであらう。満五十

歳……如何なる人に於ても満五十歳は思ひ出多き決算の時期である。我々は親密なる彼の讀者とし
て、理解ある彼の友人として、過去長きに渉る彼の詩人生活並に文學事業の跡を辿つて、今や嚴正な
る批判を彼に與へなければならぬ時である。彼は實に、世を欺かない前に、自分を欺かない嚴肅な
詩人である。冀は嚴正なる批判こそ、彼に與へる最も正當なる報酬でなければならぬ。

云ふまでもなく、ヨネ・ノグチ氏の業跡は東西兩洋に跨る。彼は、努力と天才の大部分を、その英
文の著書に傾注した。彼は、尊敬すべき意味に於て、歐米に於ける日本宣傳者である。殊に東洋藝術
の布教師として成功した人である。於是、彼の功蹟を外國人の口より聞かんとすることは、暗示的に
して而も價值あることと思惟する。即ち本書——目下慶應大學英文學教授——批評家にして詩人シエ
ラアド・ヴァインズ氏の評論を出版する所以である。

敬愛なるヨネ・ノグチ氏は、人迷惑な祝賀會を辭退するであらう。然しながら彼は喜んで此の評論
を受納するであらう。如何となれば、本書は極めて理解ある批判を彼に與へたものだからである。加
之、本書は一ヴァインズ氏のヨネ・ノグチ論でなく、英語國民全體が共にヨネ・ノグチに捧げるア
プレシエーションの言葉だからである。

出版者 長谷川巳之吉記す

第一書房文藝書目

土田杏村著	戀愛の諸問題	四六版	定價二、三〇
松岡讓著	法城を護る人々	四六版	上卷二、六〇 中卷二、三〇
岸田國士著	岸田國士戯曲集	四六版	定價一、八〇
上田敏遺著	上田敏詩集	四六版	定價三、八〇
日夏耽之介著	定本詩集(三冊)	豫約	非賣品
佐藤春夫著	佐藤春夫詩集	菊判	近刊
堀口大學譯	譯詩集月下の一群	菊判	定價四、八〇
堀口大學譯	動物詩集	雙倍版	定價一、八〇
堀口大學譯	戀の歐羅巴	菊版	近刊
堀口大學譯	レキスとイレエン	菊版	定價二、〇〇
堀口大學譯	科學の奇蹟	四六版	定價一、三〇
松村みね子譯	かなしき女王	四六版	定價一、八〇
内藤澗譯	フリタニキユス	四六版	定價二、〇〇

京 東
店 服 吳 屋 松